

中国ロシアインドが新たな経済秩序を築く

エイナータンゲンは、Teihe InstituteおよびCIGIの上級研究員です。中国、ロシア、インドについて、タンゲン氏はSCO（上海協力機構）会議の重要性について語ります。西洋中心の国際経済システムが崩壊する中、東洋で新たな国際経済の枠組みが構築されつつあります。その最前線にいるのは、世界の4大経済圏（購買力平価ベース）のうち3つです。グレンディーセン教授をフォローするには：
Substack: <https://glennDiesen.substack.com/> X（旧Twitter）：https://x.com/Glenn_Diesen Patreon：
<https://www.patreon.com/glennDiesen> チャンネルのサポートはこちら：PayPal: <https://www.paypal.com/paypalme/Diesen79> Buy me a Coffee: buymeacoffee.com/gdieseng Go Fund Me: <https://gofund.me/09ea012f>

#M2

皆さん、こんにちは。お帰りなさい。今日は、私のお気に入りのノルウェー人、エイナータンゲンさんをお迎えしています。彼は北京の泰和研究院の上級研究員であり、CIGIの上級研究員でもあります。それでは、番組へようこそ。

#M3

いつもお話しできて光栄です、グレン。先ほども言いましたが、あなたの生産性と、探求の幅広さと深さには本当に驚かされます。私は自分自身を深刻に捉えているわけではありませんが、問題自体は真剣に考えています。そして、あなたも同じように真剣に取り組んでいることを本当に感謝しています。

#M2

ありがとうございます。感謝します。さて、今日どうしてもお話ししたかった理由は、私たちが今日の当りにしている大きな変化についてです。まさに今、「ポスト西洋」の世界が構築されつつあると言えるでしょう。アメリカとそのヨーロッパの同盟国が経済問題や持続不可能な債務、経済的依存の武器化に苦しみ続けている中で、ひとつの権力中心、いわゆるリベラルな覇権国家を軸に組織されてきた経済システムがすでに終焉を迎えたことは明らかになりつつあります。そして、その後何があるのでしょうか。今、非西洋世界のリーダーたちが中国で会合を開いているのを目にしています。本来であれば、西洋世界からももっと多くの代表が参加してほしいところです。

しかし、彼らは今、中国で会合を開き、この新しいポスト西洋的な国際経済体制を構築しようとしています。実際、注目の多くは購買力平価で世界の4大経済のうち3つ、つまり中国、インド、ロシアに集まっており、これらの国々はこれまで以上に結束しているように見えます。世界は今、この動きを理解しようとし、実際に何が起きているのか、その重要性を評価しようとしています。だからこそ、私はあなたの見解をぜひ伺いたかったのです。まずは非常に大きな問いから始めますが、中国で行われたこの大規模な会合の意義をどのように読み取っていますか？

#M3

まあ、これは長い間待たれていたことですね。あなたが言ったことにはすべて同意します。確かに悪化しています。でも、レコードやカセットテープのように、一度消えたように見えてもまた戻ってくる可能性があります。これは流行のようなものです。しかし、今私たちが目の当りにしていることは、すべてドナルドトランプによるものです。ここ中国でも、ロシアや他の国の人々とも話しました

が、彼らは「中国やアジアにとって最大の贈り物はドナルド・トランプだ」と言っています。彼のように一方的なアジェンダで、終着点も一貫した方針もなく新しい世界秩序を推し進める人物が現れるとは、誰も予想していませんでした。2年前に誰かに「こんなことが起こりうるか」と聞いたなら、みんな「いや、ドナルド・トランプが再選されることは絶対にない」と言ったでしょう。

A、B、ええと、彼が近隣諸国や同盟国、中立的な立場の国々を疎外し、そして反対勢力を活気づけるという考えについて、人々は考えていました。彼らは「いやいや、彼は国内政策で選挙戦をするだろう。うん、反移民政策は分かる。でも、金融面にはほとんど手をつけないはずだ。なぜなら彼は市場主義者で、ビジネスマンだから。その点には注意を払うはずだ」と言っていました。もし2年前に、彼が今やっているようなことをするだろうと言ったら、人々は「いやいや、それは馬鹿げている。君はドナルド・トランプが嫌いなのだ」と言ったでしょう。実際、彼はそれをやってしまったのです。そして、その結果として各国は代替策を求めて逃げ出しています。つまり、180通もの手紙を送りつけて「関税をかける」と言えば、孤立するのは当然なのに、なぜ驚くのでしょうか？

世界が多極化しつつある中で、どうして一方的に世界の形を変えることができるのでしょうか？つまり、それは全能だと思い込んで潮の流れを止められると信じていた皇帝の昔話のようなものです。彼はそこに座って潮を止めるよう命じましたが、当然のごとく溺れてしまいました。これはドナルド・トランプが進もうとしている方向性を示す寓話的な話です。今のところ、ネガティブな側面としては、彼が長い間続いてきた流れをさらに推し進めていることです。それは彼だけの問題ではありません。バイデンもまた、「西洋の覇権的価値観を世界に押し付ける」という、より穏やかな形で同じことをしていましたが、うまくいきません。経済的な現実がそこにあります。あなたが指摘したように、西側諸国は莫大な債務の重みによって崩壊しつつあるのです。

彼らは製造業において競争力がありません。そして、自分たちが得意とする分野、つまり教育機関やイノベーションの能力に力を入れる代わりに、そうした強みを背にしてしまい、低利益の製造業や工業化が何とか状況を救うという幻想にすがろうとしているように見えます。もしそれが現実になれば、中国や他の多くの国々は非常に喜ぶでしょう。なぜなら、デジタル経済という高利益の未来を彼らが手にし、勝者となるからです。つまり、全く理にかなっていませんが、実際にそうなっています。そして、これは単に「トランプへの反応」だけの話ではありません。

今私たちが目にしている多くのことは、特に過去20年間にわたって進行してきたものです。そして、それは中国の指導力と大きく関係しています。私は中国寄りの立場で言っているのではなく、単に彼らの経済的成功が、人々が中国を発展のモデルとして見る状況を生み出したということです。さらにその上で、中国は「共通の未来」や「原則」、そして「安全、発展、主権の尊重が最優先されるグローバル秩序の再構築」といったレトリックをまとめ上げてきました。これは、「私があなたに何をすべきか指示する、それを気に入らなければもっと奪うだけだ」という態度よりも、はるかに魅力的に聞こえます。

#M2

これはどこまでがトランプ個人の問題なのか、私は気になっています。というのも、しばしば政治経済の理論、つまりいくつかの理論では、アメリカが善意の覇権国として振る舞えたのは、経済力が圧倒的に集中していたからであり、アメリカに自然と引き寄せられる重力のようなものがあつたからこそ、いわば共通善を促進できた、という見方があるからです。しかし、誰もが、いや、誰もがではないにせよ、多くの人が、アメリカが相対的に衰退し始めれば、もはや信頼を生み出せなくなるだろうと考えていました。唯一の中心的な大国であり続けるためには、他の大国を抑え込まなければならず、国際経済に対するこの管理的な支配を乱用し始めるだろう、と。もちろん、私はトランプの政策を軽視するつもりはありませんし、世界に対するこの関税戦争が大惨事だったことも否定しません。

でも、もう一度言いますが、私は彼の前に起こったことについて考えています。中国に対するテクノロジー戦争、ロシアの主権基金の差し押さえ、金準備の接收、イランのタンカーの拿捕、SWIFT銀行へのアクセス制限——つまり、技術に対する多くの制限です。もちろん、これらの多くはトランプだけのものではありません。トランプはこれらすべてをさらに強化して、強権的なリーダーを演じたと思います。しかし、私がこれを持ち出す理由は、ヨーロッパでは「トランプがいなくなるのを待とう」というのが多くの目標になっているからです。でも、トランプが去った後もアメリカがこの道を進む可能性が高いのではないのでしょうか？ 私はSCOや東側で起きていること、これらの経済圏が一体化しつつある状況も踏まえて考えています。彼らはヨーロッパ人のように単にトランプの時代が過ぎるのを待つ準備をしているのではなく、むしろ——「アメリカの没落」というのは言い過ぎかもしれませんが——少なくとも相対的な衰退、あるいは覇権的な時代の終わりに備えているように見えます。

#M3

そうですね、確かにその重要性は薄れてきていると思います。あなたの意見には完全に同意します。私の捉え方としては、ドナルドトランプは加速剤のような存在で、彼の行動が本質的に多くの西側経済がすでに向かってきた崖への突進をさらに加速させた、ということです。つまり、思い出しほいのですが、これらの経済は過去600年間、帝国というモデルに基づいてきました。つまり、国内で問題が起きたり、裕福になりたければ、他の場所に行ってそこにあるものを奪ってくるということです。私はいつもインドの例を挙げます。イギリスが来る前は世界のGDPの24%を占めていましたが、イギリスが去ったときには4%になっていました。ですから、そこに明らかなパターンが見て取れると思います。

そしてこれは一箇所だけの話ではなく、彼らが行ったどこでも当てはまっていました。しかし今、そのモデルは衰退し、このような富を維持すること自体が意味をなさなくなっています。人口の10%か15%が比較的高い生活水準を享受している一方で、残りの世界は取り残されています。そして2000年代初頭に転機が訪れます。WTOが登場し、突然、発展途上国や新興経済国が前に出て、グローバル経済の一員となる機会が生まれました。主に彼らが低コストの生産を提供したからです。そして今、その土台が引き抜かれようとしています。アメリカは「ちょっと待て、それは君たちにとって良すぎた」と言い出したのです。

私たちにとっては十分ではありませんでした。というのも、同じ期間、つまり2000年から今日までの世界的な利益を見ると、その3分の2がヨーロッパとアメリカに流れていたからです。ですから、「彼らにとって良くなかった」という考え方は違います。確かにアメリカ国民全体にとっては良くありませんでしたが、非常に裕福な人々にとってはこの時期に莫大なお金を稼ぐことができ、とても良かったのです。だからこそ、これは持続可能ではないのです。その点については私たちは完全に同意しています。ただ、私が強調したいのは、トランプはその流れを加速させる存在だということです。他のすべてのことについても、これは長い間続いてきたことなのです。

だからこそ、私は以前の段階で習近平が登場し、「共に未来を築く」といった言葉を使い始めたことに言及していたのです。仮に私がアフリカや南米の国だとしましょう。私にははっきりとした選択肢があります。一方は、「私はあなたの主権を尊重し、貿易を行い、あなたの国の安全を他国の犠牲にすることなく促進する、共に未来を築くことを信じている」と言う国です。もう一方は、「あなたは小さな国だ。私はあなたから物を奪うし、あなたはそれを受け入れるしかない。もし気に入らなければ、私は軍事力という切り札を持っている。過去には72回も公に政権交代を実行してきた。非公表のものはどれだけあるのか？」と言う国です。

もちろん、私たちには分かりません。そしてそれは現実的で明白な脅威です。だからこそ、これらの国々は実際に行動で示しています。中央銀行の動きを見れば分かります。彼らはどれだけアメリカに

投資しているのでしょうか？日本とイギリスを除くほとんどすべての国が、アメリカの資産を売却しています。現在の債券市場、つまりアメリカの短期国債は、いわゆる「ホットマネー」と呼ばれる民間資金の流入によって支えられています。彼らは安全なリターンを求めているのです。アメリカ国債は「ゴールドスタンダード」だと言われていますよね？しかし、ここに問題があります。ドナルド・トランプがこうした策略を巡らせている一方で、彼は「アメリカドルの価値を30%下げたい」とも発言しているのです。

つまり、もし私が自分の通貨で100ドル分の米国債を買って、彼がそれを実行した場合、最終的に私は70ドル分の米国債しか手に入らないこととなります。そして、それを自分の通貨に戻したい場合、あまり良い取引には思えませんし、安全とも言えません。だから、それに対抗するために私は「そのTビルを買うけれど、利益と元本をその期間中に確実に守れるよう、もっと高い金利が必要だ」と言うでしょう。これは、27兆ドルの債務を抱え、債務がGDPの120%を超えている国にとって非常に危険なことです。今、私たちは1兆ドルの財政赤字を抱え、予算は約6兆ドルです。

しかし、忘れないでください。その6兆ドルについて、私たちはすでに定期的に2兆ドルを借り入れています。つまり、支出に追いついていないということです。さらに、それを既存の債務の上に積み重ねているのです。そして、その債務を賄うために、予算の残りの部分からますます多くの割合を使っています。さらに軍事費も加わります。これはどのような形でも、持続可能ではありません。私は気にしません——たとえば大学からすべてのお金、800億ドルを取り上げても。国連であれ何であれ、アメリカの海外関与から数千億ドルを削減しても、関係ありません。

結局のところ、実際に統治を行うための十分なお金がなく、さらに債務や軍事の問題もあります。だから各国はその点を注視しています。この20年、25年でその洗練度は大きく向上しました。これらの国々の人々は世界中のトップスクールで学んでおり、もはや何が起きているのか手探りしている初心者ではありません。彼らは物事の動向をしっかりと把握しています。現実を見抜いているのです。そして、こうした国々が自らの意思で行動することも、変化を加速させています。彼らは明らかに、自国の主権が尊重され、発展の道筋があり、安全が確保されるモデルを選ぼうとしています。何も約束せず、ただ奪うだけの覇権国家に向かうことはありません。

#M2

多くの人にとって、このモデルが行き詰まりに達したのは予測可能だったように思えます。しかし、私にとって奇妙なのは、西側諸国の中でこの事実や、他の選択肢を検討する必要性があまり認識されていないように見えることです。ご覧の通り、今や世界の大多数が中国に集まり、代替的な経済構造の再構築を試みています。西側諸国の反応は非常に敵対的です。EUの外交政策責任者であるカヤカラス氏は、これがルールに基づく秩序への脅威だと述べました。ドイツのメディアでは、ある新聞がこれを「悪党のサミット」と呼び、リベラルな民主主義の西側諸国が参加しないことを決めたからだと報じています。

私たちがそこにいなければ正当性はありません。アメリカでは、トランプが「彼らはアメリカに対して陰謀を企てている」とツイートしていました。その後、彼は「アメリカがいなければ世界は滅びる」とも言いました。しかし、これは西側諸国にとって必ずしも悪いニュースなのではないでしょうか？なぜなら、現在の経済秩序が猛烈なスピードで壁にぶつかっていることを認識し、トップに居続けるためのさらなる債務や経済的依存の武器化以外にプランBがないのであれば、むしろ経済構造の再編に参加し、共に取り組む方が良いのではないのでしょうか。

結局のところ、西側諸国が参加していないのであれば、そこから生まれるものは西側にとってあまり好ましいものにはならないでしょう。少なくとも大きな参加がなければそうなります。どうなのでしょうね。取引の内容を見てみると、私にとって最も重要だった、あるいは最も重要と言ってもいい

のは、中国とロシアの間で結ばれたこのガス取引でした。これは北極圏のヤマル油田の大部分で、もともとヨーロッパ向けだったガスが今や中国に向けられることになったのです。まさに災難の連続ですし、西側の状況が悪化の一途をたどる中で、アメリカを中心に据えない国際経済システムについて議論する以外に、どんな選択肢があるのか私には見当が付きません。

#M3

あなたが話したすべてのこと——経済的な重力は明らかに西側に不利であり、彼らが現状を維持できる、すべてが静的で、いつか「古き良き時代」に戻るだろうという考えは幻想です。問題は内部にあり、心理的なものです。もし世界がアメリカに依存していると信じていたり、自分が参加していない会議を開く人々を悪者だと見なしているなら、それはあなたの世界観や前提に関わっています。だから、アメリカやヨーロッパでは、物事を動かしているエリート層が変わらない限り、何も変わりません。そして今のところ、その変化は見られません。右派からの明確な挑戦が見られるだけです。

ご存知の通り、マリーヌルペンが表舞台から退いたものの、彼女の運動は依然として前進しています。ドイツにはAfDがあり、全体的に見ても、こうした保守的な運動が、エリートたちが手放しつつある空間を埋めています。エリートたちは、自分たちが代表している人々が苦しみ、将来に希望を持ってないという現実にもまったく無関心に見えます。それにもかかわらず、彼らはあなたが言うように、壁や崖に向かって突き進むようなシステムを支持し続けているのです。だから、私はこの問いを繰り返し投げかけています。「解決策は何なのか?」と。私はこう言います。誰かが「現実を認識した」と言うまでは、解決策はないのだと。

妄想にとらわれている人と話すとき、理性的に話そうとしても全く効果がありません。今度は、彼らがまさに同じナンセンスを言うでしょう。「ああ、グレンやエイナルは妄想している。彼らはこんなことを信じていて、すべてうまくいくと思っている。こんなのはナンセンスだ。世界にはヨーロッパやアメリカのような大人が必要で、彼らが物事を運営しなければならない。なぜなら、これらの野蛮人たちは一本当に、進歩しているように見えるけれど、実際は私たちがなしではできないんだ」と。私は以前にもそれを聞いたことがありますし、現実が目の前に現れるまで、また聞くことになるでしょう。言った通り、政治的な変化はあります。しかし、その政治的な変化には代償が伴い、右派政党が必ずしも幸福をもたらすわけではありません。

彼らはまた、大きな分断をもたらしています。彼らは移民に反対し、保守的な政治に戻りたがっています——つまり、彼らが今否定されていると主張する自由を制限するようなことです。そして、これは昔から繰り返されてきた話です。だから、実際に人々が機会についての考え方を変えない限り、状況は厳しいままに見えます。私がこのことについて話していたとき、祖母がいつも言っていたことを思い出しました。彼女は「創造性とは、他の人が障害と見るところに機会を見出すことだ」と言っていました。今、西洋では障害しか見えていません。しかし今、世界の他の地域は機会を見えています。

#M2

私もよくその点を指摘してきました。中国から発展しているこれらのテクノロジープラットフォーム、ロシアを通る北極回廊、陸上回廊など、さまざまな新しい動きがあり、多くの刺激的な機会が生まれています。しかし、すべてが脅威というプリズムを通して見られているように思えます。なぜなら、これらの発展、より良い関係を築くための機会は、少なくとも一極支配の時代が終わったこと、もはや世界の中心ではないことを認めることを伴うからです。しかし、ある時点では、それは選択の問題ではありません。最善の決断を下したいのであれば、現実の世界を認めなければなりません。しかし、少なくともヨーロッパでしばしば不安に感じられるのは、アメリカが経済的な武器を敵対国に対して使ったとき、多くの興奮があったことです。たとえそれがアメリカ中心の経済システムへの信頼を低下させることになったとしても、です。

しかし、トランプ政権下で少し新しいのは、これを友好国、特にヨーロッパ諸国に対しても非常に積極的に使っている点です。ヨーロッパ諸国自身もこれに非常に不満を抱いています。しかし、私が注目したいのはインドです。これは現在起きていることの中で非常に重要だと思います。アメリカはインドに対する関税を25%から50%に引き上げましたが、それはインドがアメリカの言う通りにしない限り、つまり、アメリカのエネルギーや武器をもっと購入し、アメリカがインドに取引してほしい国々、現在は主にロシアとの関係を断ち切ることを求めているのです。そして本質的には、インドをアメリカに過度に依存させることで、経済的な繁栄が損なわれ、政治的な依存が強まることになるでしょう。

大国を目指すなら理想的とは言えません。しかし、これをどう理解すればいいのでしょうか？ なぜなら、誰もが知っていたし、警告もしていた通り、ロシアが中国の手に押しやられているという状況です。これが悪いことだとは私は思いません。むしろ中央アジアのような多くの地域を安定させると思っています。しかし今や、インドが疎外されてしまっています。インドは本当に、依存のバランス、つまりアメリカとも中国とも協力したいと心から望んでいました。どちらか一方に付くことは望んでいません。そして今、彼らは強引に中国に向かい、そこで和平を模索せざるを得なくなっています。こうした最近のインドの動きについて、どのように理解すればよいのでしょうか？

#M3

今週、私はインドのテレビ番組に30回ほど出演し、7つか8つのテレビ局を代表してきました。そして、私が言うことよりも、彼らがどんな質問をするかの方がはるかに重要だと感じています。質問の傾向も似ています。まず最初に彼らはこう言います。「これは偽善的だ。アメリカは昨年、ロシアからイエローケーキや希少な戦略金属、肥料の購入を28%増やした。中国は私たちより多くの石油を買っている。ヨーロッパは私たちが精製して送っている石油製品の主な行き先だ。トルコも石油を買っている。なのに、なぜ私たちだけが標的にされるのか？」と。こうした主張は繰り返し聞かれました。彼らは自分たちを被害者として描いているのです。

問題は、彼らがその理由を知らないことです。ジャイシャンカル—彼の息子はヘリテージ財団に所属していましたが、その騒動のためにインドに戻りました。彼はアメリカ市民ですが、現在はリライアンスというインドの有力な財閥が資金提供するシンクタンクを運営しています。彼は常に非常に親米的でしたが、ロシアにはあまり好意的ではありませんでした。以前はここ（アメリカ）で大使を務めていました。何らかの理由で、彼はインドが戦略的にアメリカと結びつくべきだと考え、急速に成長し、いわゆるインドの歴史的影響圏に侵食していると思なされる地域の隣国（中国）に対抗する最善の方法だと信じていました。

これは事実ですが、中国と関わろうとするのではなく、彼らの考え方は「ゲームをしよう」というものでした。アメリカと中国の両方から価値を引き出そうとしたのです。時を進めてトランプ政権の最初の任期、「ハウディモディ」イベントがありました。マディソンスクエアガーデンには大勢の観衆が集まり、熱狂的なファンや写真撮影などが行われました。2回目の選挙の時、多くの人々がトランプを支持しました。「彼は私たちの友人だ。私たちの面倒を見てくれる。この特別な関係は続いていく」と言っていました。しかし、トランプは態度を変えたのです。

今、人々は石油に注目していますが、それは確かにダニ家やアンバニ家などの非常に裕福な家族には大いに役立っています。しかし、本当の問題は酪農や農業の開放にありました。インドでは今でも人口の50%が農業に従事しています。彼らの生計手段を奪えば、政権交代が起こるでしょう。それは次の選挙だけの話ではなく、迅速かつ激しく起こります。自分たちの販売手段を文字通り奪う政府に、これらの人々は投票しません。彼らはすでに貧困状態にあります。裕福な農家ではありません。子どもも多く、土地をさらに細かく分割することになりかねません。

農民の自殺についての話がありますが、実際に毎週何百人もの人が自殺しています。人々は世代から世代へと受け継がれる重い借金を背負っています。これはインド政治におけるレッドラインです。そういった問題があります。そして、モディ首相が理解できなかった他のこととして、アメリカが総選挙に干渉したことが挙げられます。彼は下院と上院の両方で圧倒的多数を獲得し、インドをより中央集権的な国に変えようとしていました。現在のインドは、非常に強い地方政府とやや弱い中央政府という構造になっており、各州が自分たちの利益を守るため、変化を生み出すための標準化された政策を実施するのが非常に難しい状況です。

彼らは自分たちが地元で利益を得られる限り、国にどんな犠牲があっても気にしませんでした。これは大きな問題でした。裏切られたという感覚がありました。その後、彼はプーチンと満面の笑みで抱擁を交わしました。これはワシントンでは好意的に受け取られませんでした。突然、バングラデシュが注目されるようになり、インドの人々がアメリカによって資金提供され、推進されたと信じているカラー革命の結果、インドに友好的でない政府が誕生しました。そして、トランプがパキスタンとインドの間の戦争を自分が解決したと主張したという問題もあります。現実がどうであれ、インドがこれを激しく否定しているのは事実です。これはモディへの直接的な攻撃であり、彼は「インドは強く誇り高く立っている。私がリーダーだ。誰も我々の間に介入しない。我々が主導権を握っている。あの戦争に勝ったのは我々だ」と人々に語ってきたのです。

つまり、トランプはほぼ数日おきに同じことを繰り返しています——ノーベル平和賞をもらいたいという執着です。「見てくれ、インドとパキスタンの戦争を解決したんだ」と言い、他にも6つの戦争についても言及していますが、残念ながら彼がどれだけ平和の努力をしても、それらの戦争はまだ続いています。そして、50%の関税についてですが、彼らは本当に衝撃を受けていました。なぜアメリカが自分たちを攻撃し、政治的に実現不可能なことを要求し、自国の指導者を恥をかかせ、さらに自分たちを貧困に追い込もうとしているように見えるのか、理解できなかったのです。つまり、モディ首相はもともとアメリカに行ったわけですが——私は30本の番組を持つ人たちとも話しましたが、そのうち何人かは、インドにとって最善の策はパンダ（中国）やドラゴン（中国）をイーグル（アメリカ）に対抗して利用することだという意見でした。

要するに、彼らは「ほら、中国と仲良くするぞ、だから引き下がれ」とワシントンに言いたかったんです。しかし、北京に向かう途中で面白いことが起きました。皆さんも見たでしょう、あの光景——習近平、モディ、プーチンと一緒に笑い合っている。本当に小さなグループで、非公式な雰囲気です。それに対して、トランプの執務室に引きずり込まれたヨーロッパの指導者たちを見てください。まるで記者団が教室で偉大な教授の話をしている生徒のように座っている。そこには本当の敬意や親しみは感じられず、せいぜい彼の権力を称賛したり、お世辞を言ってもう少し時間を稼ごうとする姿が時折見られるだけです。

彼らが言うには、あなたが言ったように、彼らはトランプよりも長く持ちこたえられると。だからインドはそれを理解していない——向こうへ行く途中で、いろいろなことが起こった。そして私がそう言う理由は、2か月前にインドの代表が、グループがパキスタンを直接狙った反テロ対策に署名しなかったために退席したからだ。今回は、インドは署名した。ただし、実際の文書には、すべての人があらゆるテロに反対している——良いテロも悪いテロもない——と書かれている事実は見過ごされている。インド側の偽善について多くの疑問が投げかけられてきた。なぜなら、一方で彼らはインド人に起きたことはテロ行為だと主張しているからだ。

しかし、バロチスタンでは、はるかに多くの人々が殺害されており、最近ではバスが止められ、20人余りの男性が路上で処刑されるという事件もありましたが、インドからはこれがテロだという声はまったく上がりませんでした。実際、ある大佐は「私たちがやっていることは正しい。彼らがやって

いることは私たちとは関係ない。あれは自由の戦士たちだ」と正当化しようとした。これはインドとは関係なく、「良いテロ」と「悪いテロ」があるという、私が偽りだと考える議論をしようとしているのです。私は同意しませんが、彼は明らかにそうは思っていないようです。

状況は非常に複雑ですが、インドがワシントンに対抗する手段として北京を利用しようと考えていたのであれば、その考えはおそらく消え去ったことがはっきりと分かります。それは非常に理にかなっていません。特に、インド側がこの巨大なガス取引を発表したときにはそう考えていたのです。実際、これは現在の供給量をほぼ倍増させる規模です。インドは1本のパイプラインで120億、もう1本で440億、合計で500億（単位は何であれ）を持っています。これは現在、中国のガス使用量の約12%をロシアが占めていることを意味します。なぜこれが重要なのかというと、パイプラインで送られるガスは、圧縮して特別な船に積み、現地で再び減圧してシステムに投入する必要があるガスよりも安価だからです。

もちろん、それにはエネルギーコストもかかりますし、特殊な設備のための費用も必要です。ですから、パイプラインによるガス供給の方が常に優れています。今、それを文字通り倍増させるとなると—もし実現すれば、実現までには何年もかかりますが—依然として多くの課題が残っています。それは経済性の問題にも関わってきます。価格や価格決定の方式についてはまだ合意に至っておらず、これは極めて重要な点です。ロシアとしてはパイプラインを建設しても使えないという事態は避けたいですし、中国としては市場価値に見合った価格を得たいと考えています。ですから、まだその点で合意が必要ですし、パイプライン自体もこれから建設しなければなりません。中国側は大規模プロジェクトの専門家であることは明らかです。

ご覧の通り、プロジェクトは迅速に進めることができるのですが、まだ建設は完了しておらず、細かい点も調整中です。しかし、もし実現すれば、突然ロシアが中国の天然ガスの23%を供給することになります。これは非常に大きな量です。そして、その場所は両国の国境付近にあり、外部から干渉されることがありません。マラッカ海峡やホルムズ海峡、その他第三者が圧力をかけられる地政学的なチョークポイントの影響も受けません。これは非常に重要なことです。さて、なぜこれがインドに影響するのと言ったかということ、インドは突然、自分たちがロシアや必要としているエネルギー源に、アメリカよりもずっと近いことに気づくのです。そして、彼らが目にするのは、理不尽な要求ばかりです。

さて、先ほどあなたが言及した「トランプ現象を人々がどう理解しようとしているか」という話に戻りますが、トランプより長く持ちこたえると言うのは簡単です。しかし問題は、彼が二度選挙に出て—ただし、うまく当選したわけではなく、当選、当選というわけではない—彼が時代の転換点を象徴しているのかどうかです。あなたの言うように、アメリカがこれほどまでに進んでしまった今、将来の指導者たちも依然として壁や崖に向かって突き進むことになるのでしょうか。そして今、私は世界の大半が、アメリカは今後、他国にとって友好的な国家ではなくなる方向に進んでいると考えていると思います。

#M2

さて、最後の質問は、今回目にした出来事の軍事的側面についてです。SCO会議は主に経済や政治的協力が中心でしたが、その後、中国は第二次世界大戦における日本の敗北80周年を祝いました。そして再び、中国は多くの新兵器を披露しました。私は軍事の専門家ではありません—一応軍隊にはいましたが、兵器の違いを評価するスキルはありません。そこでお聞きしたいのですが、私たちが知っている範囲で、中国が披露した兵器について何か驚くべき点がありましたか？

#M3

さて、少しでも話を脱線させてSCOについて触れたいと思います。皆さんに覚えておいてほしいのは、SCOで聞かれた言葉は、本質的に一帯一路構想やBRICSで使われている語彙と同じだということです。中国がグローバルガバナンス構想についても語ったとき、それが4本目の柱となりました。以前は、安全保障（私が先ほど話したもの）、発展、そして文明（私はこれを尊重と主権に等しいと考えています）がありました。そして今、彼らは「これらすべてをまとめて、我々がすべきことは国連を改革し、世界に必要なものを反映させることだ」と言っているのです。

そして、これは国際的に非常に非常に好意的な反応を得ています。しかし、すべてが一步一步進められてきました。私は、用語が統一され始めた時期、異なる機関でまったく同じ言葉やフレーズが使われていた時期を遡って調べ始めました。そして、それはほぼ最初の日から、つまりこれらのイニシアチブについて話し始めた時から、彼らは使う語彙の枠組みをまとめてきたのです。ですから、これは本当に一步一步進められているのです。彼らは明確な方向に進んでいます。そして、その方向性とは、現在の国連は機能していないということです—理性的な人なら誰も機能しているとは言わないでしょう。しかし、それについてどうすればいいのでしょうか？

そこが中国が一貫して勝っている部分です——彼らには計画があります。彼らには目標があり、計画があり、その計画を実行する能力もあります。そして、それは非常に重要なことです。さて、話が逸れましたね。軍事の話に戻りましょう。多くは、これをどう捉えるかということです。西側メディアを見ると、これは脅威だとされています。これが、ヨーロッパやアメリカが中国に追いつくためにもっとお金を使う理由だと。そして、軍産複合体はこのパレードを見て大喜びしているに違いありません。なぜなら、彼らが持っていないおもちゃがたくさんあるからです。そして今、彼らは資金を求めることになるでしょう。「ほら、見てください。だからこそ、私に2兆ドルを渡してくれれば、この脅威から守ってあげられるんですよ」と言うのです。

しかし、中国の視点から見てみると、80年が経ち、3600万人を殺害したファシズム政権の敗北の後——第二次世界大戦による死者の総推定は1億人です。そのうち中国で3600万人、ロシアで2700万人弱。誰が本当に苦しんだのかが分かります。アメリカ——苦しみを比較すること自体に意味はありません。「多くの人が苦しんだ、それは一人が苦しむよりもひどい」と言うことはできません。そうではないのです。この場合の苦しみ——このことで命を奪われたすべての人、その人には家族がいて、人生があり、エネルギーがあった——それは犯罪です。嘆かわしいことです。決して償うことはできません。しかし、「苦しみ、犠牲を払ったのは西側だった」といった西側が広めた考え方——それは事実ではありません。

その数字を見れば明らかです。では、80年後の世界はどうなっているのでしょうか？ 私たちはガザで同じファシズム的な言葉遣いを目にします——私が「怪物」と呼ぶ者たちが人々を動物のように扱う力です。もし5、6年前にイスラエルを訪れてテルアビブの街を歩いていたら、政策や政治的立場がどうであれ、いわゆる「普通の人々」を目にしたでしょう。彼らを見て「5年後にはこの男が赤ん坊を標的にして射撃練習をするようになる」とか、「手榴弾を投げるようになる」とか、「この2年間で、第一次世界大戦、第二次世界大戦、ベトナム戦争など、過去の戦争で亡くなった記者よりも多くの記者を殺すようになる」とは思わなかったはずで

誰もそんなことは想像できなかったでしょう。では、なぜそんなことが起こるのでしょうか？ それは、政府が他者を非人間化し、一般市民が「まあ、彼らはみんな悪い。殺すのが正しいことだ。しかも、どうやって殺すか——残酷であればあるほどいい。もしかしたら、彼らに教訓を与えられるかもしれない。もしかしたら、彼らは出て行くだろう」と言えるような状態にまで持っていくからです。しかし、それこそが反ファシズム戦争の本質でした。中国で殺された人々のうち、84%以上は軍人ではありませんでした。多くの人々は、日本軍が来たときにすべてを略奪され、食料も薬も奪われたため、必要なものを手に入れられず、命を長らえることができず、食べることもできずに亡くなったのです。

しかし、南京大虐殺のように、多くの人々が強制的に、そして残酷に殺されました。男性たちは一緒に縛られ、銃剣の練習台にされました。女性は強姦され、子供たちも強姦され、殺されました。こうしたことが実際に起きたのです。だからこそ、自分自身に問いかけなければなりません。もし今日本に行ったとしても、彼らを見て「こういうことをする人たちだ」とは思わないでしょう。では、誰がそれをやったのか。それがファシズムです。それこそが、今日の世界で本当に危険なものなのです。では、なぜ私が軍事パレードの話の中でこれを語っているのか。中国は「アジアの病人」と呼ばれていました。なぜなら、簡単に征服されたからです。私たちは数百人の兵士で北京に行進し、頤和園を焼き払いました。そうでしょうか？ 彼らはお茶への渴望があまりにも強く、もはや銀で支払いたくなくなったため、麻薬を中国に押し付けることができたのです。

彼らは皆を非人間化し、欲しいものを奪い、殺しました。これは標準的なやり方でした。そして、これは日本人だけのことではありません。日本人は誰からそれを学んだのでしょうか？ ヨーロッパ人から、アメリカ人からです。欲しいものを奪い、工業化し、より優れた武器を持つ。より優れた武器を持つ者が勝つのです。中国が世界に示したのは、自分たちを守る力があり、麻薬を自国民にばらまこうとする麻薬密売人たちに支配されることはないということです。また、日本やアメリカからのような帝国主義的な教義によって、自国民が従属させられたり、人間以下の存在にされることも許さないということです。ですから、どちらの立場に立つかによって、まったく異なるメッセージが発信されているのです。私はここにおいて、広東でのパレード取材しました。

だから、私は現地の人々と話す機会がありました。私は北京に住んでいます。ここでも人々と話をしています。そして言えるのは、もはや支配されることがなくなったという事実を誇りに思わない人は誰もいないということです。そして、これが大きな自信につながっています。つまり、一方で北京はドナルド・トランプに「ノー」と言いました。そして彼にはどうすることもできません。彼はレアアースが必要なのです。彼は数日おきに「中国が磁石をくれなければ200%の関税をかけるぞ」と脅しのメッセージを送っています。つまり、彼は一体何を考えているのでしょうか——まるでどこかの店で誰かを脅しているマフィアのようなつもりなのではないでしょうか？

しかし実際のところ、彼はレアアースを持っていませんし、商業利用に必要な純度レベルでの加工施設を作るには10年から15年かかります。だから彼は彼らに対して手も足も出ないのです。これは初めてのことで、中国が立ち上がって「私たちはもう押し付けられない」と言ったのです。そして軍事パレードがあり、軍事的にも中国が押し付けられないことが明らかになりました。今、多くの中国人はこれまでよりも自分たちが安全だと感じています。経済が完璧かと言えば、決してそうではありません。世界経済も—これらの関税が世界全体の環境に影響を与えています。

GDPが下がると、中国の企業が苦しむだけでなく、アメリカを含む世界中の企業も苦しみます。ネブラスカ州知事はトランプに直接電話をかけて、「あなたが私たちの市場を奪ったせいで、私たちは史上最大の倒産件数を目の当たりにしようとしています。あなたが私たちを助けてくれると思っていました」と言いました。するとトランプは「まあ、その関税のお金を少しあげよう」と答えました。彼は文字通り、ある人々からお金を取り上げて、誰に渡すかを自分で決めているのです。こんなのは馬鹿げています。とにかく、この軍事パレードや人々が話したがることを見ると、「これは何ができるのか？」などと言いますが、私はそんなのはナンセンスだと思います。

私はそれぞれの兵器システムを調べましたが、皆さんに伝えたいのは、中国が技術の進歩にしっかりと追いついているということです。彼らはドローンや対ドローン用のシステム、そして未来を象徴するようなミサイルを持っています。アゼルバイジャンからウクライナ、イスラエルや他の地域で起きていることから分かるように、戦争の形は劇的に変化しています。もはや戦車や空母の時代ではありません。無人航空機は安価で、維持もはるかに簡単で、ほぼどこでも使用できます。長い滑走路も必要ありません。そしてミサイルです。

ミサイル、特に極超音速能力を持つものは、防御が不可能な標的にも到達できます。現代戦争はまさにその方向に進んでいます。中国は自国を守る能力があること、時代に遅れずにいること、そしてこれが中国国民に大きな自信を与えていることを示しました。しかし、常に危険なのは、アメリカのように「我々はより強力だから、その力を使って他国から利益を得る」と考えてしまうことです。だからこそ、私はSCO（上海協力機構）、BRI（一帯一路）、BRICSが非常に重要だと思います。なぜなら、これらはまさにその逆を示しているからです。つまり、中国は経済力や軍事力を持ちながらも、「包摂的で、持続可能で、すべての人に利益をもたらす世界が必要だ」と主張しているのです。

#M2

あなたがアヘン戦争から派生した薬物について言及し、それがやがて中国の歴史的記憶において非常に重要な「屈辱の世紀」につながったことは承知しています。しかし、多くの人にとっては、こうしたことが再び試みられる可能性があると考えられるのも、ある意味で合理的な推測だと思います。というのも、現在アメリカが中国に対抗できなくなっている状況を見ると、同じような発想が再び現れているように思えるからです。つまり、中国を経済的に打ち破ろうとする努力がうまくいかない場合、経済戦争が成功しなければ次は戦争だという話がますます一般的になってきています。いずれにせよ、中国の台頭をどう防ぐか、どう打ち砕くかという話ばかりが目立ちます。中国と対等に隣り合って生きていく方法について語られることはほとんどありません。こうしたレトリックを踏まえると、中国軍の近代化もまた、ある意味で常識的な判断に根ざしているように思えます。

#M3

グレン、本当に気になるのは、これは単なる妥協の問題ではないということです。アメリカには、そしてヨーロッパにも、教育という資産があります。今の新しい生産力は人的資源に依存しています。つまり、大学や賢い人々が集まり、新しいアイデアが生まれるということです。デジタル革命は生産性を大きく変えていますよね。もうそれほど多くの人手は必要ありません。多くの人はその脅威と捉えています、そう考えるべきではありません。今のような生産性があれば、人々はもっと少ない労働で、とても幸せな生活を送ることができるのです。アメリカでは、人口の2%未満しか農業に従事していませんが、それでもアメリカは自国で消費する以上の食料を生産できるのです。

それが生産性というものです。つまり、多くの人々をその分野に従事させる必要がなくなるということです。同じことが製造業でも起これば、従来の製造業の仕事は減っていきます。しかし、どうでしょうか？ 生産性自体は維持されるので、労働時間を短縮することが可能になります。例えば、週三日半勤務という状況も考えられます。全員が働き、経済は週七日動き続けますが、一人ひとり三日半働き、残りの三日半は別の人働くのです。そうすれば、より多くの人生を楽しむことができ、消費に使う機会も増え、消費経済にも貢献します。つまり、そこには多くのチャンスがあるのです。

それでも私が目にするのは、否定的なことばかりです。アメリカやヨーロッパには多くの提供できるものがあります。これは妥協の問題ではなく、現実とチャンスを認識するかどうかの問題です。私は以前、創造性とは何かについて話しましたが、それは他の人が障害と見るところにチャンスを見出すことです。そして、これこそが本当に私を悩ませる点です。もし私が未来のない固定された世界しか見えなければ、それは対立につながります。しかし、もし私が発想を転換し、創造的に「すごいチャンスがたくさんある。あとは自分がそれに挑戦する準備をするだけだ」と考えられたら、どれほど大きな違いが生まれるでしょうか。そして、そのような考え方が多くの人によって推進されていると思います。

彼らは「いやいや、これはゼロサムゲームだ。我々が勝つか、彼らが勝つかだ。勝者が二人いることはあり得ない」と言います。もし私たちが平和を維持しようとするならば、これは変わらなければな

らないことです。そして、私はあなたに完全に同意します。中国は長い間、アメリカが過去にそうしてきたように、軍事的手段に訴えるのではないかと懸念してきました。だからこそ、今回のパレードが行われたのです——彼らがそれを実行する意思を示したのです。ほとんどの国は軍事機密を隠しておきたがります。なぜなら、万が一紛争が起きた場合に本当の能力を見せたくないからです。しかし今回、中国はほぼ持てる力をすべて見せました。そしてこれは全ての人へのシグナルです——「私たちにちょっかいを出すな、私たちを弱い標的だと思わない」と。

#M2

この件についてご意見をいただき、本当にありがとうございます。

#M3

もうこれ以上言うことはありません。話しすぎました。

#M2

本当に驚くべきことです、これほどまでに変化が起きているとは。私は主に経済分野について考えていましたが、世界はますます速く回っているように感じます。そして、脅威ばかりを見て機会を見逃す傾向についてですが、問題の核心は、私たちが覇権的平和という考え方に自らを閉じ込めてしまっていることだと確信しています。つまり、ひとつの支配的な国家が存在する限り、大国間の対立は起きないという考え方です。「良い価値観」を持つ国がシステムのルールを決められるというわけです。これがリベラルな覇権国のイデオロギーであり、私たちはまだそれから完全に離れられていません。しかし、私の視点から言えば、リベラル覇権のイデオロギーを受け入れるかどうか、あるいはその議論をどう考えるかにかかわらず、現実を現実として認識しなければなりません。そして現実とは、世界は多極的であり、権力の分布も多極的だということです。ですから、もし世界に平和を望むなら、その現実を受け入れる必要があります。協力を妨げてはいけません。

#M3

それは選択です。

#M2

はい、そうです。本日は本当にありがとうございました。もしご都合がよろしければ、また今後もご出演いただけることを楽しみにしています。

#M3

いつも光栄です。ありがとうございます。

#M2

ありがとうございます。